

「Luck Now (酪農) のススメ」

兵庫県立農業大学校
畜産専攻 2年 増田 みき

いつからだろうか。私が酪農に対して親しみを持ち出したのは。幼い頃、学校で友達の家族旅行の話を知ると、家に帰ってから「自分だけどこにも旅行に連れて行って欲しくない。」と両親に駄々をこね、よくわめきちらしたことがあった。そんな私が畜産に携わり、畜産に関する勉学を重ねているうちに、両親の気持ちが何となくわかるようになった。

それは、牛という生き物を責任を持って飼うには、1年・365日、牛から目を離すことなく一体となり、牛の成長を見ていかなくてはならないということ。まして酪農というのは搾乳を行わなければならない、日々が戦いでもあるということ。

私の家は緑豊かな淡路島の南に位置する南淡路市で酪農を家族経営で営んでいる。幼い頃から私の居場所は牛舎か圃場であり、それが当たり前の中での成長だった。今の若者には考えられない生活かもしれないが、こういった日々が私には充実している毎日である。朝から搾乳・えさやり・除糞・圃場管理。そして搾乳と毎日が同じ事の繰り返しである。

そんな私には夢がある。父を超える酪農家になることだ。

私にとって一番近い存在にある父は、私のよき理解者であり、目標とする人間だ。幼い頃は父親の後ろばかり付きまとい、父親みたいになりたくて、すること全て自身の目で見て覚えていった。牛に給与する餌の種類と量から搾乳に関する機械の使い方に至るまで、今では体で覚えている。特に子供というものは、何に関しても好奇心が旺盛で、それがあってこそ今こうやって「畜産」に携われることができたと思う。

今でも毎日が新たなことの発見である。毎日、牛に接して飼育していることがこんなにも楽しいことだなんて思うと思ってもいかなかった。大好きな家族のため、また地域発展のためにも私は頑張っていこうと思う。

中学・高校生時代に私を最も夢中させたのがクラブ活動のバスケットボールであった。バスケの練習が忙しく家の手伝いをしない日々が続いた。高校の頃だったのだろうか、祖父の体調が急に悪くなり、また母の更年期が始まったため、一気に父に負担がかかっていた。家族のそのような事情も気にせず私はバスケに夢中になっていた。休みの日に久しぶりに父と会話をした時、私は事実を知らされ度肝を抜かれた。

あんなしんどそうな顔をする父を見たのは初めてであった。

それからの私はできるだけ父の負担を少なくしようと、アルバイトが終わってから一人で牛舎に入り、牛に給与する数日分の乾草を棚から降ろしたり、わらを切った。部活が終わってからも昼はほとんど遊びに行かず、できるだけ家の手伝いに励んだ。手伝いをしていくうちに

私の中で「酪農」というものがより身近なものになり、今の私に生き方を教えてくれる幸運なもの — Luck Now (酪農) — となった。

そして、「酪農」を通して私は地域に何か貢献したいと思うようになった。また人の為に何かできるだろうか。物心ついた頃から牛とともに成長し、地域の方の力があってこそ、今、私は兵庫県立農業大学校にまで通う事ができたと思っている。そして「酪農家」のトップにたってみなを引っ張っていきたい。Luck Now (酪農) のすばらしさを世間の皆さんに伝えていきたい。こんな大きな夢は私にはそう遠くない日のことのように思う。

地域発展に貢献するにあたり、若手の農業者の育成が大事ではないだろうか。地域の普及センターの力を借り、農業者の技術・知識を育成する会を開催するのはどうだろうか。

現在、後継者が減り、高齢化が進む中で我々のような酪農家を志す若手が引っ張っていかなくてはいけないと思っている。そこで私たち若手農業者が農業を、畜産を対外的にいかに上手く伝えるかという事が地域発展に繋がる運動になると思う。

私はいつか父を超える。そのためには今よりも知識・技術を多く身につけてはならない。今、私は農大で和牛の飼育に携わっている。このことで酪農とはまた違うことが得られている。畜産という分野は広いものである。子供の頃は畜産＝酪農というイメージしかなかった私が「和牛」の勉強をするだなんて思ってもいなかった。畜産という分野を多角的な広い視野から見ること、また学んでいくことは、私にはとても重要なことであると思う。

ところで、バイオエタノールの技術の発展に伴い配合飼料となるトウモロコシ等の輸入に影響を及ぼし、飼料価格の高騰として畜産農家に大きな負担を及ぼしている。我が家もその内の一つである。

このことにより、配合飼料がみるみる内に値上がりした。このような状況で我々畜産に携わる者がいかに低コスト・なおかつ高品質の牛乳を生産するか。これが今、私の抱える問題の一つである。

私の家では、飼料となるトウモロコシ・草・稲わらは自分で作っている。ただし、南淡路市で自作している酪農家はほんのわずかである。また、高齢化が進むにつれ、次々と酪農家が減ってきているのが現状である。さらに、担い手となる人間の育成もできなければ、後継者となる若者も少ないのが現状である。

その一つの原因として私が思うには、酪農という産業の辛さ、大変さだけを見てきているからではないだろうか。酪農というのは奥深いものである。体力的には大変なものかもしれない。しかし、その半面、牛とともに牛乳を生産するという素晴らしい産業だと実感できるものであると思う。

家族だけでするのではなく、地域の酪農家みんなで牛の飼料となる飼料作物を作るのはどうだろうかとは私は考えている。皆で協力し合う事で機械等を共有でき、規模も拡大できる。

作業を分担することで体力的にも楽になるのではないだろうか。また、困ったことがあれば皆で協力し合って問題を解決していきたい。私はそんな経営を心から望んでいる。幼い頃から育んでもらった地域の発展に貢献していきたいと思う。

私の夢というのは大きいかもしれない。大きすぎるかもしれない。しかし「夢は大きく」とよく父は言っている。こんな大きい夢は私にとって、そう遠い日の事のように思わない。何か近くにあるような気がしている。

これからは夢に向かって、自分と戦い、また毎日が新鮮で収穫が多い日にしていきたい。感動・感謝・そして挑戦。この気持ちを忘れずに — Luck Now (酪農) — となるために一歩一歩進んで行きたいと思う。
